

2002年8月3日

バルト三国の日本語教育事情（バルト三国日本語教育連絡会議報告）

=====

エストニア日本語教師会・会長

高橋 清彦

（タリン市立ヤルヴェオツア高校・日本語教師）

I. 共通事情：

1. バルト三国は何れも旧ソ連に所属し、ソ連時代にはソ連邦内各自治共和国内での日本語教育は認められて居らず、旧ソ連時代所属時代（約50年間）を通じ、各自治共和国毎に選抜された極少数（50年合計数名）のエリートがモスクワ大学またはレニングラード大学で「ソ連人」の枠内で「日本語要員」と日本語の教育を受けたに留まっていた。
2. 1989年のソ連崩壊、1991年のバルト三国の「独立回復」に伴い、バルト三国各国毎に「日本語教育」が始まったが、「日本語教師」の不足、地理的に日本との遠い距離、政治・経済関係が薄く、その為に三国は何れも「欧州での日本語教育最後進地域」に留まっている実情である。
3. 今版、3月4日5日の両日、フィンランドのヘルシンキ大学で実施された国際交流基金の「巡回セミナー」に始めてバルト三国で正規の日本語教育を実施する全教育機関9校（リトアニア3大学、ラトヴィア1大学・1高校、エストニア3大学・1高校）からの日本語教師合計11名（中1名欠席）が日本国外務省の招聘で参加したが、バルト三国の日本語教師が一堂に会するのは全く初めての機会であり、従来各国の「日本語教育事情」は全く御互いに知り得ない状況であったので、このセミナー時間内の4日（月）に「エストニア日本語教師会」の強い提唱にて「バルト三国日本語教育連絡会議」が開催され、御互いにヴェールに閉ざされていた各国での「日本語教育」の実情が明らかにされた。
4. 各国を共通する事情は下記の通りであった。
 - 1) 各国とも政府の公的な援助は全くないに等しい（リトアニアのみ若干の自国政府の補助が期待出来る）。
 - 2) 各国とも母語と日本語の辞書が編纂されて居らず（ラトヴィア語のみは存在するが誤りが多く実用に供し得ない）。
 - 3) 旧世代は日露辞書が有効に使えたが、独立回復後に教育を受けた世代はロシア語を解さなくなり、日露辞書は学習者が使いこなせない時代になって来ており、好悪を問わず英語媒体の教材や辞書に頼らざるを得ない。
 - 4) 三国とも高等教育機関はエストニアの一大学（タリン教育大学）とリトアニアの一大学（クライペダ大学）を除く全大学が早稲田大学と「交換留学生契約」を締結して何人かを早稲田大学に送り込んだ結果、学生の日本語力の著しい向上を見ているが、これも留学生の生活費は自弁であり、これに対する当該国政府や大学に補助の予算が無く、生活・経済上の理由で現状は少数の留学生派遣に留まっている。

今後の見通し：

以上、言語語族系統の違い、政治的な理由（例えば管轄する日本国大使館が縦割り行政：リトアニアは在デンマーク、ラトヴィアは在スウェーデン、エストニアは在フィンランドの日本国大使館）であり、経済関係の低調などから三国とも日本語教育には大きな共通する障害理由を抱えていることも判明した。今後、この様な阻害要因を如何克服するかがバルト三国側、日本側、双方の課題であることが認識された。

会議の成果として日本国大使館に実情を訴えて改善を図るしか方法はないと思われる。

2002年3月4日

バルト三国における日本語教育機関の概要

凡例 ①コース開設年 ②位置付き ③教員数 ④学習数 ⑤使用教材
⑥日本における提携校 ⑦その他特記事項

1. リトアニア

1) 国立ヴィタウタス・マグヌス大学 (Vitauto Didiojo Universitetas)

- ① 1993年
- ② 主専攻 (東洋学センター所属)
- ③ アルヴィタス・アリシャウカス (Mr. Arvydas Aklisaukas)
- ④
- ⑤ 初級 「楽しく聞こう」(文化外国語専門学校編、凡人社)
中級 「楽しく読もう」(文化外国語専門学校編、凡人社)
「ヤンさんと日本の人々 (ビデオ教材)」(国際交流基金日本語国際センター編、ビデオ・デッキ)
その他、新聞などの生教材
- ⑥ 関西外国語大学
国際基督教大学
早稲田大学
- ⑦ 日本語だけではなく、日本文化、日本人の考え方、日本式経営学なども教授。
東洋学センターは、スギハラ・ハウス内に設置されており、多方面にわたり
杉原財団からの援助を受けている。

2) 国立ヴィリニウス大学 (Vilniaus Universitetas)

- ① 1992年
- ② 主専攻 (東洋学センター所属) と自由選択科目との両方
- ③ ダリア・シヴァンバリーテ (Ms. Dalia Svambaryte)
- ④ 約30名
- ⑤ 初級 「新日本語の基礎」(海外技術者研修協会編、スリーエーネットワーク)
「Situational Functionsal Japanese」(筑波ランゲージグループ編、凡人社)
「現代日本語コース」(名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会)
中級 「中級日本語」(東京外国語大学留学生日本語教育センター編、凡人社)
- ⑥ 早稲田大学
- ⑦ 大学自体は1579年開学との古い歴史を持つ。以前は副専攻だったが、昨年
(2000年9月) から、主専攻となる。

3) 国立クライペダ大学

- ①
- ② 主専攻 (東洋学センター所属)
- ③ ヴィタウタス・ドウムチュス (Mr. Vytautas Dumcius)
- ④
- ⑤

- ⑥
- ⑦

2. ラトヴィア

1) 国立ラトヴィア大学 (Latijas Universitete)

- ① 1992年
- ② 主専攻 (現代言語学部・東洋学部)
- ③ 福井美佐、山本淑乃
- ④ 20名強
- ⑤ 初級 「みんなの日本語 I、II、」 (スリーエーネットワーク)
中級 「大学生と留学生のための論文ワークショップ」 (くろしお出版)
- ⑥ 早稲田大学
- ⑦ 開設当時は副専攻、96年に夜間の主専攻に、その後昼間の主専攻になる。
教員が少ない為、隔年で学習者を募集。

2) リーガ市公立リーガ文化学校 (Rigas Kulturas Vildusskola)

- ① 1993年
- ② 選択必修第一外国語
- ③ 小畑由美、イネス・ブラウア・ブルーケ (Ms.Inese Blaua-Breke)
- ④ 180名 (小学校1年—高校3年 12学年合計)
- ⑤ 初級 「ひろこさんのたのしいにほんご」 (凡人社)
「日本語初歩」 (国際交流基金日本語国際センター編、凡人社)
「新日本語の基礎」
「みんなのにほんご初級 I、II、」
「モジュールで学ぶよくわかる日本語」 (アルク)
- ⑥ なし
- ⑦ イネセ氏は同校出身者。2002年9月から市内の別の公立学校 (大規模校) と本格的な合併が始まり、それに伴い学習者数の増加が見込まれる。

3. エストニア

1) 国立タルツ大学 (Tartu Ulikool)

- ① 1997年
- ② 自由選択科目 (哲学部・言語セナー所属)
- ③ 宮野恵理
- ④ 30名強
- ⑤ 初級 「日本語初歩」
中級 「日本語中級 J301」 (スリーエーネットワーク)
- ⑥ 早稲田大学
- ⑦ 各クラスは週2コマ (1コマ90分) の授業ながら、1年目から4年目までの4クラスを開設、幅広い学習者のレベルに対応している。

2) 国立タリン教育大学 (Tallinna Pedagoogikaulikool)

- ① 2000年
- ② 自由選択科目 (言語学部東洋学センター所属)
- ③ 園部広幸
- ④ 20名弱

- ⑤ 初級 「初級日本語新装版」(東京外国語大学留学生日本語教育センター編、凡人社)
中級 「中級日本語」(同上)
 - ⑥ なし
 - ⑦ 同大学の学生のみならず、広く市民にも開放しており、高校生も受講している。現在は初級2クラス、中級1クラスを開講。2002年9月から、新たに初心者のクラスを開講予定。
- 3) 私立エストニア人文大学 (Eesti Humanitaarinsituut)
- ① 1989年
 - ② 主専攻(東洋学部)
 - ③ マレット・ヌッケ (Ms. Maret Nukke)
 - ④ 33名
 - ⑤ 初級 「にほんご45じかん」(専門教育出版)
「新文化初級日本語」(文化外国語専門学校編、凡人社)
「みんなの日本語初級 I、II」
など、約8種類の教科書を学習者のレベルに応じて使用。
中級 新聞などの生教材
 - ⑥ 早稲田大学
女子学習院大学
 - ⑦ 日本語習得は、論文(エストニア語で可)を書く為の、必要手段と位置付けている。
- 4) タリン市立ヤルヴェオツツア高校 (Tallinn Jarveotsa Gümnaasium)
- ① 1993年
 - ② 選択必修第三外国語
 - ③ 高橋清彦・園部広幸
 - ④ 15名
 - ⑤ 初級 「にほんごかんたん 1・2」(研究社出版)
「みんなの日本語初級 I」
「初級日本語 新装版」
 - ⑥ なし
 - ⑦ 高校1年から3年までの3年間、日本語を学習するが、同一クラス内でも各学習者のレベルに応じて、使用教材を変え、学習内容も変えるなど、木目細かい指導を実施している。

以上